留学生の日本語による文学創作の意味を考える
——「留学生文学賞」の設立と発展を通して

栖原　暁

はじめに

作家でも文学者でも言語学者でもない著者が、「留学生文学賞」について語ることについて、些かおこがましさを感じる。賞創設当初はこのような発展を遂げるとは予想せず、毎回送付されてくる作品が少しずつ増え、作品の質が上がってくるのが目に見えるようになって、われわれ主催者の方が逆に留学生の心意気に励まされながら、ここまで続いてきた。結果、1年ごとにいつ止めようかと迷いつつ、また関係者の励ましとご協力に支えられつつ、すでに7回まで来てしまったのである。

私は、1975年より、東京都文京区にあるアジア文化会館で、在日留学生支援の仕事をするようになった。留学生を対象とした宿舎の運営や、相談、支援、交流などを仕事としてきた。1997年、東京大学に着任後も今日に至るまで、留学生相談、支援、交流が主たる仕事であり続けている。

従って、私の「留学生文学賞」とのつながりは、「文学」でも日本語でさえもなく、「留学生」である。本稿では、このような立場から「留学生文学賞」の設立と発展を軸に書き進めたい。

在日留学生の概況

まずは在日留学生の概況を見ておこう。

わが国において「留学生」として認知されるためには、文部科学省の定めにより、以下の二つの条件をみたしていなければならない。

(1)　以下の教育機関に在籍中であること。

1　大学、大学院、短期大学、高等専門学校

2　専修学校の専門課程（専門学校）

3　準備教育課程（一部の日本語教育機関のコース）

(2) 「出入国管理及び難民認定法」が定める在留資格「留学」を有すること[1]

である。

文部科学省資料によると、2009 年 5 月 1 日現在、13 万 2 千 720 人の外国人留学生が日本で学んでいる。中曽根元首相時代の 1983 年に、「留学生十万人計画」が打ち出された。当時は一万人ほどであった留学生数を 21 世紀初頭までに 10 万人に増やそうという計画であった。図 1 に示すごとく、途中減少するなど紆余曲折はあったが、この計画は、2003 年に数値上達成された。また図には総数のほかに、3 種類の留学生の人数推移が示されているが、国費留学生（文部科学省から奨学金を支給されている留学生）、外国政府派遣留学生（出身国政府の奨学金を受けている留学生）、およびそれ以外私費留学生の数の推移を示した。図を見ればわかる通り、国費留学生は 10％に満たず、90％が私費留学生である（文部科学省資料、以下同様）。

またもう一つの大きな特徴は、アジア地域出身の留学生が 92.3％と 9 割以上を占めていることである（図 2）。

これを出身国･地域別で見れば、59.6％を占める中国をはじめ、韓国（14.8％）、台湾出身者（4.0％）の上位 3 カ国・地域を併せると 78.4％となる。日本と歴史的・文化的な関わりの深い漢字圏出身の留学生が 80％近くにもなっていることが分かる。次にベトナム（2.4％）、マレーシア、タイ（各 1.8％）といった東南アジア諸国が並び、欧米諸国では 7 位に 2,230 人（1.7％）のアメリカが入っている程度である（表 1）。

在学段階で見れば、大学学部生・短大・高専の留学生が約 6 万 7 千人で一番多く、全体の約半数を占め、大学院生が四分の一強、残り四分の一が専修学校生（但し専門課程生）や準備教育課程生等である。

さらに、留学生の居住形態をみてみると、学校や公益法人等が設置する宿舎に入居できている留学生は 4 分の 1 に満たず、75％以上が民間のアパート等に住んでいる。この面でみると、留学生受け入れは地域社会の協力なくしては、成り立つまい。

1　このほかに民間にある日本語学校で日本語等を学んでいる者については在留資格「就学」が与えられる。財団法人日本語教育振興協会よると、2009 年度現在、全国に日本語教育施設は 420 施設あり、そこで学ぶ「就学生」は 4 万人を超えている（http://www.nisshin-kyo.org/j147.pdf)。しかし、2009 年に「出入国管理及び難民認定法」が改正され（同年 7 月 15 日公布）、2010 年 7 月 1 日をもって、「就学」が廃止され、「留学」に統合されることになっているが、ここで示されている数字は 2010 年 3 月末における現行法に従った数字である。

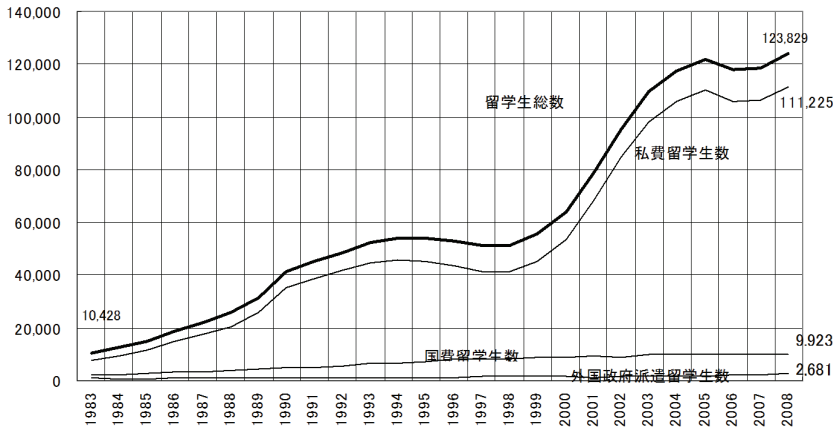

図１　在日留学生数の推移

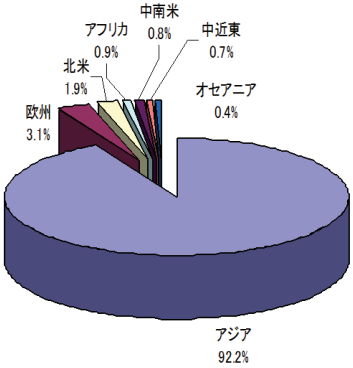

図２　出身地域別留学生比率

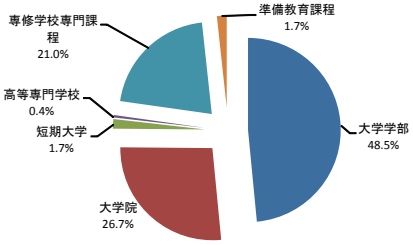

図３　留学生の在籍段階別人数割合

表 1　出身国・地域別留学生数と比率（2009.5.1 現在）

国（地域）名	留学生数	構成比
中国	79,082	59.6%
韓国	19,605	14.8%
台湾	5,332	4.0%
ベトナム	3,199	2.4%
マレーシア	2,395	1.8%
タイ	2,360	1.8%
アメリカ	2,230	1.7%
インドネシア	1,996	1.5%
バングラディッシュ	1,683	1.3%
ネパール	1,628	1.2%
その他	13,210	10.0%
総数	132,720	100.0%

（文部科学省資料）

檸檬屋での出会い

さて、留学生文学賞は、当初「ボヤン賞」の名称で 2000 年に始まった「留学生による日本語文学新人賞」である。「ボヤン」という名称は、内モンゴル出身の中国人留学生であったボヤンヒシグ氏の略称をとったものである。そのボヤンヒシグ氏との出会いが、留学生文学賞の出発点である。

ボヤンヒシグ氏は、1990 年代はじめ、中国内モンゴルより私費留学生として来日し、法政大学で現代詩を学んでいた。当時の他の中国人私費留学生の例にもれず、同氏には国からの送金はなく、生活費と授業料は全て自前で賄わねばならなかった。アルバイトと勉学に追われる留学生活を送ってきたため、卒業するまで日本をじっくり観察するいとまもなく過ごしてしまった。やっと卒業するにあたって一年間ほど詩人としてゆっくり日本を見てみたいと考え、先生などに相談するが、なかなか道が見つからない。

出入国管理法では、日本で在留するために厳しい審査がある。大学を卒業した留学生が日本を観察するために 1 年の滞在を得るのは困難であった。1990 年に大きく入管法が改正され、大学で勉学した専門を活かす仕事なら会社に就職することで在留を得ることができるようになった。しかし、ボヤ

ン氏のような目的のために、採用してくれる会社は簡単には現れなかった。

そこで留学中に知り合い、師事していた詩人の荒川洋治氏に相談した。話を聞いた荒川氏が相談のために連れて訪れたのが、学生時代からの友人住枝清隆氏が営んでいた居酒屋「檸檬屋」であった。1999 年のことである。当時檸檬屋は、台東区の谷中にあり、そこは作家やジャーナリスト、アーティストなどを常連客とする一風変わった居酒屋だった。

写真 1　ボヤンヒシグ『懐情の原形』

檸檬屋の主人や常連客達は、荒川氏からボヤン氏の話を聞いて、「これまでアルバイトと勉学に忙しかった留学生に対し、卒業して用が済んだら帰れということか」と悲憤慷慨し、在留延長のために奔走した。一部の客たちは、ボヤン氏に対して、日本留学中に体験したことや思ったことを日本語で書いてみたらどうかと勧めた。

常連客達の義侠心も手伝い、滞在の継続はなんとか実現できたところに、ボヤン氏が一気に書き上げた原稿を檸檬屋に持参した。これを読んで、その内容の素晴らしさに感動した常連客達は、関係者に呼び掛け、お金を出し合って基金を作り、詩文集『懐情の原形――ナラン（日本）への置き手紙』を西治出版（株）より出版した（写真 1）。日本と母国への思いを日本語で綴ったこの作品は、新聞の書評欄、文芸誌などで取り上げられ、高い評価を受けた（写真 2『毎日新聞』を参照）。

留学生文学賞の創設

檸檬屋では、日本で学ぶ留学生の中にはこんな素晴らしい作品を書くことができる人材がいるのだから、他にも隠れた優れた人材が多数いるに違いない、留学生に日本語文学作品の創作を奨励して、日本で苦労して勉強している留学生を元気づけようじゃないか、とだれかが言いだし、同調者が集まり、資金を出し合い、この賞ははじまった。だから最初は、ボヤンヒシグの通称名をとり、ボヤン賞と命名されていた。ボヤン氏も出版された本の原稿料を

毎日新聞　（第3種郵便物認可）

2000年6月24日

「8年間の総決算」で出版した本の印税もとに

留学生が文学賞創設

「留学生の励みに」と話すボヤンヒシグさん

日本で8年間日本語と文学を学んだモンゴル系中国人の留学生が「勉強の総決算」として出版した本の印税を基に、自分と同様の外国人留学生を対象にした日本語の文学賞を創設した。内モンゴル自治区出身のボヤンヒシグさん(37)で、賞の名は「ボヤン賞」。在日中に知り合った詩人や作家が協力する。「慣れぬ環境で日本語と格闘する留学生たちの励みになれば」と関係者は期待している。

ボヤンヒシグさんは7月の帰国を前に4月、日本での生活を詩とエッセーでつづった「懐情の原形」（英治出版刊）を出版した。北京でモンゴル語の詩集も出した詩人で「もっと勉強したい」と来日、東京の日本語学校と法政大大学院に通った。日本語で本を書くに当たっては、師事する詩人の荒川洋治さん(51)と、荒川さんに誘われ常連となった荒川区のスナック「檸檬屋」の仲間の励ましがあった。作家の宮崎学さん(54)らだ。

出版後「本を出せただけでうれしい。印税はいらない」とボヤンヒシグさん。仲間が文学賞創設を提案した。賞は太陽と月をモチーフにした彫刻作品と30万円（1人）。初版の5000部を売り切れば約70万円の印税が見込まれ、これを基金に運営する予定。彫刻の製作は、やはり檸檬屋常連の金工作家、北村鐘さん(54)が実費で引き受け、荒川さんや宮崎さんが審査委員を務める。応募の分野は短編小説、詩などと文学全般。締め切りは11月30日で、年末に第1回受賞者が決まる。問い合わせは檸檬屋(03・3828・2028)。

モンゴル系中国人のボヤンヒシグさん

日本語学ぶ励みに

【長倉　正知】

写真２　書評『毎日新聞』2000年6月24日（読書欄）

まるまるこの賞のために提供すると申し出た。

実は私は、当初この賞にそれほど積極的ではなかった。わたしはそれまで数多くの留学生による日本語に接してきていた。多くは奨学金申請のための作文であったり、大学等に出すレポートであったり、入管局宛の在留延長などの理由書であったりする。それらは、経済支援を得たり、在留許可を得たりするのが目的で作成された文書で、日本人の自尊心をくすぐるような論理

で構成されたものが多い。それらを長年添削してきた経験が身に付き過ぎたせいか、なかなか留学生が、日本語で文学作品を綴るということがイメージしにくく、どれほどのものが集まってくるか実は内心やや怪しんでいた。

しかし、私の予想は見事に外れた。送付されてきた原稿は、表現力に拙さがあるものも含まれていたものの、私がそれまで接してきた留学生の日本語とは根本的に異なるものであった。誰に媚びるでもなく、本心から書きたくて書いた、いわば、日本人が文学作品などを書く時の目線と同じ高さのものであった。

このとき私は、30 年近く前にあった、国費外国人留学生受け入れ制度をめぐるある事件を思い出した。その後、機会があり、ある雑誌に留学生文学賞について書くように依頼された拙稿にその事件について触れたことがある。該当部分を引用しよう。[2]

文相に直訴した 7 人の留学生

先日たまたま留学生支援団体主催の講演会があり、休日でもあったので聴きに出かけた。講演者は旧知の元国費留学生で、卒業後も帰国せず日本に定住している。現在は大学の講師を務める傍ら、地域の外国人支援活動に協力したり、祖国の発展のために NGO を立ち上げるなど活発に活動を行っている才媛である。日本で小説も数冊書いている。その淀みのない日本語での講演の中で、自身の日本留学時代の進学にまつわる回顧談が出てきた。

彼女が文科省（当時は文部省、以下同じ）招聘の国費留学生として来日したのは 1974 年のことである。当時日本の大学の学部に入学するために来日した国費留学生は、まず東京外国語大学付属日本語学校（現・東京外国語大学留学生センター）で一年間日本語を集中的に勉強した後、希望の大学に進学した。ところが、その前年から文科省は受け入れの規則を改め、文化系の進学希望者については東京外国語大学に設けられていた「特設日本語科」に入学する道しか用意していなかった。しかもそこは留学生だけが学ぶ特殊な学科であったため、7 人の文系志望の留学生達は、他の大学の経済学部や教育学部などの文系学部に入学し、日本人学生と一緒に学びたいと主張したのである。7 人の留学生達の強い意志は、アジア文化会館を中心とした関係者のサポートを得て、当時

2 「留学生文学賞の志」財団法人 日本学会事務センター刊 *SCIENTIA* 24 号、2002 年 12 月号

の永井道雄文相の特別の計らいを引き出し、結局全員が希望の学部に進学できるようになった。ことの顚末を簡略にすればこんな事件で、当時の新聞紙上を賑わせもした事件でもあった。

この事件で象徴的だったのは、当時の文科省係官や受け入れの日本語学校関係者が、この７人の留学生の主張に対してとった当初の対応であった。留学生の学力（日本語力）が低いことを理由に、日本人学生と一緒では授業についていけないのは目に見えている、として反対したのである。外国人に対するこうした日本人の思いは、実は彼らに限らず、日本人一般に通じる思いでもあっただろう。外国人が日本語力を日本人と同じように身につけるのは難しいのではないか、であるがゆえに文系の専門分野で日本人学生と一緒に学ぶ「学力」はないのではないかという思いである。そしてそれらは、現代の日本の若者たちの心からもなお完全には消え去ってはいないのかもしれない。

この７人の留学生のうち上述の講演者以外にも大学院に進学し、卒業後は日本に定住し、専門を活かして日本と出身国とのまさに架橋的な役割を果たしている者もいる。当時の彼らの選択が真剣で適切なものであったことを証明したことになろう。

こうして、居酒屋の酔客達の戯れ言から偶然始まった、「留学生文学賞」はスタートをきり、千鳥足ながら歩を進め始めた。

当初は、詩人の荒川洋治氏、作家の宮崎学氏らが中心となり始まったのだが、連絡先もなく、やむを得ず檸檬屋を事務局としてスタートした。作品が送付されて来ると常連客のだれかが、コピーをとりにコンビニに走るといった具合であった。が、後に事務局を東京大学留学生センターの私のオフィスに移し、選考委員も作家の辻井喬氏、第一回受賞者で詩人の田原氏（テイエン・ユアン、東北大学講師）、さらに評論家の呉智英氏、漫画家の西原理恵子氏、作詞家の吉岡治氏ら多彩な人材も加わった。もちろんみな報酬なしの手弁当である。

留学生文学賞は未だに檸檬屋と密接不可分の関係にある。上記の選考委員の多くは檸檬屋の客であり、事務局、協力者などの関係者を含めて時々檸檬屋に寄り合い、ポスターを作り、寄付金を集め、日程や方針を議論するなどの打ち合わせをほろ酔い加減で行っている。また、授賞式の後の二次会も檸檬屋で行うのが恒例化している。せっかく決めたことが酔いに紛れてだれにも記憶されていないなどの「事件」も時として起こるが、留学生文学賞は依

写真３　田原氏　第一回文学賞授賞式（2001 年）

2005年留学生文学賞を受賞した　黄　飆（ビョウ）さん　35

顔

「日本語の腕試しのつもりが」

写真４　第三回受賞者、黄飆氏（『読売新聞』2005 年 6 月 22 日）

然として檸檬屋を出入りしながら、千鳥足で進んでいる。

受賞者の活躍

第 4 回受賞者であるシリン・ネザマフィ氏による『白い紙』[3] が文学界新人賞に輝き、芥川賞候補にもノミネートされた。留学生文学賞も一躍世間の注目を浴びることになったが、シリン氏の著した受賞作『サラム』[4] は、留学生である主人公がアルバイトとしてアフガニスタン人女性の難民申請の通訳を引き受けたことを通じて得た経験が描かれている。その淡々とした叙述は、特別日本を批判するものではないが故に却って日本の閉鎖性が浮き彫りにされた好著である。

その前の第 6 回の受賞者黄飆　『バジオ』[5] も、留学生が、たまたま出稼ぎ

3　シリン・ネザマフィ著『白い紙』文藝春秋社、2009 年 8 月

4　シリン・ネザマフィ著「サラム」『世界』2007 年 10 月号～ 11 月号、No. 770–771、岩波書店

5　黄飆著、「バジオ」『月刊アジアの友』2005 年 5 月号～ 6 月号、435–436 号、財団法人

写真５　メナ・アラヤ・アーロン・エリー氏、第６回留学生文学賞授賞式（2008 年２月）

労働者として来日した中国人と留学生と知り合い、同居するようになる。労働者との交流を通じて見えてくる日本社会、また労働現場で知り合った日本人女性との恋愛などを中心とした作品である。両作品とも、留学生固有の立場から見えるが、日本人には見えない日本社会の断面を図らずも私たちに分かりやすく示している。留学生の作品はこのようなものが多く、これが留学生文学賞の一つの魅力であり意味ではないだろうか。

また、詩人の田原氏は、すでに日本語による詩集を２冊世に送り出しており、詩人・翻訳家としての独自の立場を日本で築きつつある。特に２冊目の『石の記憶』[6] は、2010 年３月に 第 60 回 H氏賞 (日本現代詩人会主催) に決まった。

2008 年（第６回）に受賞が決まったメナ・アラヤ・アーロン・エリー氏（コスタリカ出身）の詩篇は、代表的な詩の雑誌『現代詩手帖』にも掲載され、高い評価を受けている。[7]

留学生の急増と減少の狭間で

先述したように、現在日本で学ぶ留学生は 13 万人を越える。「留学生十万人計画」が打ち出されて以来、留学生は増加していくのだが、子細に見ていくと、急増と停滞が繰り返されている。（図 1）私は、この 35 年間留学生に直接接する場で仕事をしてきたが、留学生が急増するたびごとに、留学生と日本社会との間に軋轢が繰り返され、留学生に対する社会的イメージが変化してきた。大まかにみると以下のようである。

（Ｉ）80 年代前半～ 90 年代前半：「国際化」の象徴として留学生を歓迎するムードが高まるが、80 年代後半になるとアルバイトをしながら苦学する留学生の姿が目立つようになり「おかわいそう留学生」論に傾く。が、その後 80 年代末～ 90 年代前半には、留学生・就学生は勉学ではなく金を稼ぐた

アジア学生文化協会

6　田原著『石の記憶』 思潮社、2009 年 10 月

7　『現代詩手帖』2009 年 07 月号、思潮社

めにきているという「偽装留学」「出稼ぎ留学」というレッテルが貼られるようになる。

（Ⅱ）これにともない 90 年代半ばから留学生数が停滞、減少を始める。政府は急ぎ「留学生倍増計画」を打ち出し、奨学金を大幅増するなどして対策を取り始めた。また、なによりも 1999 年に入国管理局が入国審査を極端に緩和する方針を打ち出した。結果、留学生数は、2003 年までの約 3 年間で一気に倍増し、10 万人計画は達成される。しかし、この間、警察・マスコミなどが外国人犯罪を大きく取り上げ、留学生が恰も「犯罪予備軍」であるかのようなキャンペーンも行われた。この時、文部科学省の中央教育審議会は、留学生受け入れについて「量より質を重視する」方向に転換する提言をまとめ、入管局の入国審査も再び厳格化するなど、2005 年をピークに留学生数が減少に転じた。

（Ⅲ）2008 年 1 月福田元首相が「留学生 30 万人」計画を打ち出す。① 2020 年までに留学生を 30 万人にする ②卒業生の半数は日本で就職させる③英語で学位取得できるコースを増設する、というものである。

これと平行して、高度人材受入推進会議が首相官邸に設けられ、日本の人口減少に対応して、「高度人材」を海外から獲得する方向で議論がなされている。一部で議論されている移民受け入れ政策論とも相俟って、留学生受け入れがその推進の中心的存在として再びクローズアップされ始めている。今度は留学生に「移民予備軍」としてレッテルが貼られるようになるのであろうか。

留学生文学賞の意味

実は日本で暮らす外国人全体で見ると、図 4 で示す通り、2008 年末現在で、すでに 220 万人を越えており、全人口の約 1.74%をしめるに至っている。この 20 年間で 2 倍、10 年で 1.5 倍となっている。しかも今後益々増加していくことが予想されている。これらの異なる文化や言語、価値観を背景に持つ人たちをどのように受け入れていくのかは、現在日本が直面している大きな課題である。留学生文学賞に応募されてくる作品は、意図せずともこうした日本が抱えている問題点を浮き彫りにするばかりでなく、多文化社会に向かいつつある日本人や日本社会に対してその在り方や方向性を示唆する質をを含んでいるのではないのか。

日本のなかで、もはや外国籍住民は、部外者でもなくゲストでもない。日

本の地域社会に在住する住民である。彼らにレッテルを貼るのを止め、地域社会の一員として迎え入れることが必要である。彼らは日本とは異なる文化と国籍を持つ住民である。留学生文学賞は、一人の留学生との出会いが生み出した小さな賞であるが、この賞が日本と日本人がその文化や言語の裾野を広げ、外国人を対等の仲間として受け入れることのできる質の高い多文化社会を構築する上で、多少とも役立つのではないかという淡い期待も今は持つに至っている。

プロフィール

現職：東京大学国際センター教授

専門分野：留学生相談、留学生交流、留学生政策、移民政策

主要著書・論文：

『アジア人留学生の壁』日本放送出版協会（NHK ブックス）、1996

『国際化の中の移民政策の課題』（駒井洋編）明石書店、2002

「『留学生 30 万人計画』の意味と課題」（『移民政策研究』第 2 号）移民政策学会、2010

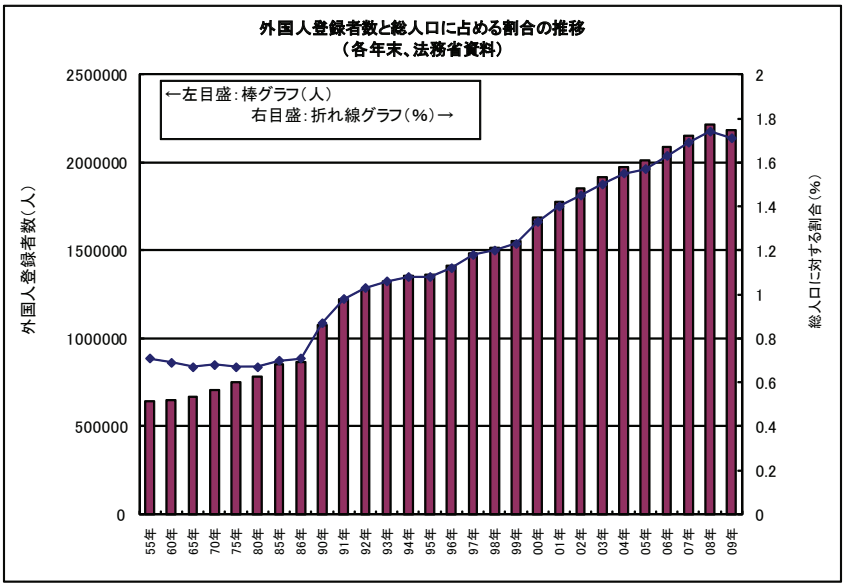

図４　外国人登録者数と総人口に占める割合の推移